

## 三面宝珠羯磨文様錦横被

縦七九・四 cm 横一九八・八 cm

京都 仁和寺蔵

はじめに

御室仁和寺に秘伝される数々の名宝の内に、同寺平安時代の門跡である、入道性信親王の着用を所伝とする三面宝珠羯磨文様錦の横被がある(図3・30)。横被は袈裟を着けた時に露わになる右肩を覆う法衣で、一般には袈裟と共裂であることが多く、そうでなくとも袈裟と同様に優れた染織品が用いられるのである。

同寺所蔵の室町時代や桃山時代に描かれた仁和寺開基の宇多法皇像には、この錦横被着用の様がとらえられている。これは時代が伝承と前後するのでうなづけないが、とりもなおさず、この一肩がまさに寺宝中の寺宝ともいうべき位置にあり、尊重しつづけられて今日に至ったことをうかがわせるものである。

さてこの横被は先述のように、平安時代中期の性信親王所用と伝える。周知ながら同親王のあらましについて触れておこう。

生年は寛弘二年(一〇〇五)、八月一日。三条天皇皇后が夢中に、外国人かとおぼしき僧から「胎内に宿らせていただきたい」と依頼されて受胎したという。(出雲路敬和『仁和寺史談』仁和寺 昭和四十二年) 皇后はその後、生臭いものを一切口にしないで、ついに皇子

師明親王が誕生したとする。やがて十四歳で御室に入り、応徳二年(一〇八五)九月二十七日に示寂。齢八十一歳であった。

すなわちこの横被は従来から平安時代中期の染織遺品として注目されて来たものである。周知のように当代の染織品の遺例はきわめて少数で、しかもあまり大きくないもの、あるいは断片で伝えられる中に、この一肩は堂々たる大作であり、昭和三十八年に文化財修理によって修理されたとはいえ、保存状態もきわめて良好で大いに注目されて来た。

中でも、この錦を組織の面から検討が加えられた例としては、すでに『日本上代織技の研究』(佐々木信三郎、川島織物研究所 昭和二十六年)があり、平安時代の錦として確実な諸例とともにとりあげられた。その詳細は同書で見られたいが、一応ここでも同書によらせていただいで、そのあらましに触れておこう。

この錦は奈良時代の緯錦に基本のある組織をしめし(図31・32)、経糸は素入りと羽二重の交互、すなわち一本と二本並べを繰り返している。さらに素入りの経糸は母経おもだてと命名されて組織の根幹をなすが、羽二重の経糸は奈良時代の場合は文様表現に重要な役にあるものの、本来、一切表面にあらわれない性質を持ち、これは陰経かげだての名でよばれた。しかしこの陰経は平安時代の諸例においては、文様表現に役立つのではなく、ただ伝統的にとりあげられており、抜き去っても文様に混乱を生じない。ただその存在によって錦の帛面にふくらみを持たせるいわば芯の役目をはたしているので、あらためてだぞ経と名づけられた(図31・32)。

ところで横被の錦はすなわちこの平安時代緯錦の組織上の特色をそなえているところから、先述のように同書では平安時代の数少い

錦の例としてとりあげられたのである。

その後、この錦は時に「平安時代」の例（西村兵部『紋織II』日本芸術叢書 芸艸堂 昭和四十六年、『日本の染織』東京国立博物館 昭和四十九年）とされ、あるいは「平安時代から鎌倉時代にかけて」（山辺知行『染織』日本美術大系VIII 講談社）の制作と考えられ、さらには全く「鎌倉時代」（西村兵部『織物』日本の美術12 至文堂 昭和四十二年）の範疇に入れて考えられた。これらの場合では伝承にかかわらず特に鎌倉時代的な要素を認めようとするのは明確ではないが、その造形的な印象を尊重する立場からであるように考えられるのである。この小考でも横被の作期をどこに置くかという点に注目し、以下に検討することとしたい。

まずこの横被を眺めることから始めよう。

田相にあたる部分に、先述の緯錦が用いられており、冴えた美しい紺地に文様が織りあらわされている。主文様はこの横被の名称ともなっている三面宝珠で、蓮台に安置された三つの宝珠を囲むように連珠を配した光背の表現があり、さらに周囲には燃えさかる炎が立ちのぼる。この主文様は、小さな羯磨文様をいわば地文様として互の目に配した上に、段をなしてあらわされる。横被の幅一杯に四つが横一列に並び、経方向で見た場合には、宝珠の蓮台四個分の個所で、文様が上下つき合った方向をしめし、この部分が着用時に肩山となったことが知られる。なお中央部を畳み込んで着用するところから、この部分の宝珠の経二列の褪色はゆるやかで、紺地に映える文様の紅が鮮やかである。

横被の縁に言い及ぶ記述を見ないが、幅約一〇・八センチメートルの金欄がめぐらされている。金欄は紅染地に牡丹花を二輪、外に

向けて背合せし、直径五・〇×五・五センチメートルの、円花文とし、段文様を構成している。地は経三枚綾でZ流れ、金箔には幅広・狭とりどりが見られ、全越に織り入れ、同じくZ流れの地搦みで押える（図33）。この古格をしめす金欄について言及されることがないのは、おそらく田相の錦とは時代の異なるものとし、したがって後補と考えられたからであろう。

なお裏地は明らかに江戸時代後期と察せられる紫綾で、松皮菱つなぎ地に六つの雲頭で唐花風を構成した単位の散し文様である。

## 色彩

まず錦の色彩感覚が問題として取りあげられよう。みずみずしい紺地に特に火炎の紅が対照的で、視覚に突きささるような鋭い印象が得られる。平安時代の錦としてかねて知られている二・三についてこの色彩の面からうかがうこととしよう。聖護院の智証大師像は康治二年（一一四五）に造立されたものであるが、その胎内に納入された袋裂がある。これはすでに褪色しているが、紅地で童子蓮唐草に七宝文を上文様風あらわしたものである。紅地に織り入れた白糸や萌葱糸がおだやかに明るく趣をしめている。また神護寺に伝来する後白河法皇寄進の一切経経帙は、竹の副骨に久安五年（一一四九）の墨書のあるものが発見され、縁の錦や裏面の綾裂の作期が推定される。この錦には八種の文様の見られることが報告されているが（佐々木信三郎『新修神護寺経帙錦綾私見』川島織物研究所報告（第一報）昭和三十三年）、色感の性質にやや差異がみとめられるもののいずれも紅地で、やはり温雅な華やかさ、白糸の映える明るさ

が特色となる。さらに平安時代の錦の遺例で落すことのできないのが、厳島神社の錦半臂である。現状ではこれも褪色が進んで、地は褐色味のある黄色を呈しているが、文様はいわゆる蜀江文様の一類といえ、円や方形による割り付で全体の文様を構成する。いかにも平安時代の錦であることを思わせるのは、円形の中心部の二羽が向い合って舞う鳳凰のおだやかな形や、円や方形の外郭をくくるようにあらわされた偏平な蝶の形姿である。

さらに色彩の面でいえば、半臂の襷の背面部分におそらく当初に近いと考えられる色彩が残存してをり、その輝く絹糸の染め色の美しさに全く感動されるのである。明るく華やかでしかも温さにあふれ、この半臂が何時同社に奉納されたかは不明ながらこれぞまさしく平安時代の和様の色彩の典型をしめしているといえよう。

こうした限られた例ではあるが、平安時代の特色ある色調に対して、この横被錦には先述のように、全く異質のむしろ冷たく理智的な感覚が得られるといえよう。また緯糸の色にも紺・黄・萌葱・紅・白などが見られ、さらに蓮弁はほんのりと暈調に処理され、蓮弁の色は蘇芳によるかと見え紅ともやや異なるようである。このように色彩の強さや複雑さ、変化を目した点には、平安時代の錦とは異った世界がうかがえるのではないだろうか。

まず第一印象を尊重して色彩の特色をうかがったのであるが、次には三面宝珠はじめとする文様の一つ一つについて類例と比較しながら時代の特色を検討することとしよう。

## 文様

錦の意匠は四つの要素によって構成されている。それらは1三面宝珠、2火炎、3蓮台、4羯磨である。同一主題を比較検討しようとするのであるが、他の資料は絵画であり、彫刻でありなどして、織物の錦とは本質的に表現に差異の生ずることは常に念頭におかなければならない。

1三面宝珠。まず三面宝珠を含めて宝珠表現の諸例をうかがうことから始めよう。その飛鳥時代における古例は、法隆寺献納宝物(東京国立博物館保管)中の金銅灌頂幡(図34)に見られる。これは一珠が火炎を負い蓮台上に安置されている例で、円形の下方に先とがりの宝珠をおき、さらに蓮台に接触して中心部があらわされている。次に奈良時代の例では薬師寺の吉祥天画像(図35)か左手にささげる例を見出す。この場合も一珠形式で、しかも三重の暈調的表現になり、下方が暗く上方外縁が白色にあらわされている。同代の唐招提寺押出仏にも、並ぶ諸仏像の上方天蓋に一珠形式の宝珠が飾られているが、いずれも火炎・蓮台をそなえた表現で、宝珠は下方に重みのある印象をあたえる。平安時代前期の場合は、観心寺、如意輪観音坐像の宝冠に(図36)、まさに三面宝珠が彫られている。正面のものには単に正円形がいわゆる三つ盛りにならわされているが、左右の二つは同様に三つ盛りながら単なる円形とは異り、頂上のものは下方に仰月形の受けのような形象を加え、下二個はむしろ頭巾のように別の捲り出しで覆っている。これはきわめて特色のある表現である。さて平安時代後期の例では東京国立博物館の虚空蔵菩薩(図37)

の画像の場合が鮮明である。これは胸前に左手で三面宝珠を奉安するが、三つ盛りのそれぞれの宝珠は、いずれも上方に濃色を集める形で、むしろ火炎などと同様に、上昇しようとする意欲を明確にしている。さらに下の二珠はわずかに左右への動きをおわせるようである。鎌倉時代の例は、また一珠形式ながら畠山記念館の清瀧権現像が、右手にささげる姿に見られる。この場合はふくよかな円形の上方を白く塗っているが、その部分に奥行きを見せつつ斜に同心円を重ねる表現が、いよいよ宝珠の上方へ動こうとする意識を明確にする。さて南北朝時代と考えられた（関根俊一『仏・菩薩と堂内の莊嚴』日本の美術28 至文堂）、個人蔵の、愛染明王坐像安置厨子の天蓋彩色の三面宝珠（図38）は、三珠ともに等しく珠の上方に色を異にした重円を集めている。しかしここには下二珠の左右への動きはない。

あらましながら以上のような宝珠表現の変化を見れば、この横被の場合、比較的虚空蔵菩薩像の宝珠に近いと考えられる。しかしそれが正円に近く見られたのとは異って、これはやや豎長となつているのに注目される。もつともこの点については先述のように横被が織物で同文様中の羯磨などにも見られるように、幅において縮んだ形跡もあつて、豎長表現がより極端であるといえないこともない。こうした点が、織によつて特殊を忘れてはならないことである。しかしそうしたことを視野に入れても、なおかつこの宝珠は平安時代後期の場合よりもはげしく強い動感を見る者に与えずにはおかない。そしてそれは下方二珠においていっそう明らかに左右への動きをしめしている点において、数ある宝珠表現の中でも特色があるといえよう。

2 火炎。火炎表現は日本では飛鳥時代以来、仏教美術に常に見られるのは周知である。特に平安時代以降に注目すると、各種の仏画（図39）に見られるように、内に強力な気迫をおさめつつ重厚になお一種おだやかな表現をしめすのが、やがて鎌倉時代には、例えば平治物語絵巻の三条殿夜討（ポストン美術館）（図40）に見られるように、きわめて旺盛に、火力強く燃えさかる表現に移行し、ついに承久本北野天神縁起絵巻（北野天満宮）（図41）に見る、鋭く目を射るはげしい火勢に到りつくといえよう。

横被の場合は、燃えあがる炎の柱を中心に、さらに左右に突起する小炎を立ちのぼらせる。いま類似の炎を思い出すのであるが、それは鎌倉時代初期の餓鬼草紙（京都国立博物館）の食水餓鬼（図42）の件りで、水辺の餓鬼が水を飲もうとすると火に化す炎である。これも中心となる炎に左右の小炎をあらわしたものである。しかしなお絵巻の場合は火勢に豊さがあつて強く、この錦のように瘦せてやつれた感はない。

3 蓮台。仏教美術においては、蓮台は仏画・彫刻・工芸を問わず、あらゆる個所に見出すことが出来るのはいうまでもない。平安時代の場合、ほぼいづれもゆつたりと大きな感があり、仏や菩薩の重味を受けてむしろ偏平ともいえる趣をしめす。しかしこの場合は蓮弁は鋭く突つて、炎と同様に上方を刺すようである。これも織物ならではの幅の縮みに影響されているものといえようが、他に例を見ないところである。

4 羯磨。最後に地文様風にあらわされている羯磨を見ることしたい。

羯磨は金銅密教法具の内に数多くの例を見出すことが出来る。し

かもその形式上の特色から編年的な整理も行なわれて時代を考える上でもっともふさわしい要素であるともいえよう。例えば教王護国寺(図43)の平安時代の例が、洗練された細づくりであるのに比して、諸所蔵の鎌倉時代のもの(図44)は、あたかも首をすくめたように鈍重である。また東寺の羯磨の三站は全体の印象と同様に鋭く爽快で、中央の突起をはさんで相寄る左右の爪形が、その先端を鋭敏に伸ばし切っているが、鎌倉時代の諸例では左右の爪形は先を折ったように、ある太さのまま片まがりの先端を形づくっている。

さらに以下のように織物としての比較資料があるのは幸である。それは西大寺に伝えられる。中興開山叡尊が勧請した大神宮の御正躰及び金剛・胎藏両部の板曼荼羅を奉安した厨子の錦戸帳で(図45)、同様に羯磨文様があらわされている。この錦戸帳は勧請された弘安三年(一一八〇)が成織の時期を示唆するが、まさに鎌倉時代の諸例に見るように、先端で片まがりした形姿をしめすのである。

ところで横被の場合はいかがであろうか。これはさすがに平安時代の羯磨のさわだった繊細感はなく鈍いが、なお左右の爪形はその先端を伸ばした様子に表現されている。

以上はきわめて雑把な検討であるが、このように意匠の特色からは、本横被がすでに鎌倉時代に入ったものであることを否めない。しかしなお平安時代後期的な要素も認められ、過渡期というにはいささか鎌倉時代に傾きは大きい、十三世紀前半頃と考えてはいかがであろう。

#### おわりに

このような立場に立てば、縁の金欄もあながち後補と考えなくともよく、むしろその古様さが生きることとなり、伝世の金欄としては最古の一例であると、積極的に考えてもよいのではないだろうか。本横被の時代がこのように伝承とは別に平安時代よりも若く考えることとなっても、その格調高い作域はいささかもそなわれることはなく、大作であり、しかも状態のすぐれた、中世の染織資料として、きわめて貴重な作例であることはゆらぐことはない。

(切畑 健)